

「福岡県リサイクル総合研究センター」を活用した自治体・企業の取り組み みんなのでつくろおう！ ごみゼロの循環型社会

今日の環境問題を解決するには、私たち一人ひとりがリデュース(Reduce)／ごみを減らす、リユース(Reuse)／繰り返し使う、リサイクル(Recycle)／再資源化する)の3Rを実践し、資源の循環を促す社会システムに変えていくことが必要だ。福岡県では循環型社会づくりを推進しており、福岡県リサイクル総合研究センターを2001年6月に設置し、廃棄物の資源化に関する技術開発や社会システムを構築する総合的な研究を進めている。同センターを中心に産学官民共同で進められている代表的なプロジェクトを紹介する。

福岡県リサイクル総合研究センター

循環型社会づくりの先導的な開発拠点



北九州学術研究都市(北九州市若松区)の産学連携センタービルにある「福岡県リサイクル総合研究センター」

福岡県リサイクル総合研究センター(センター長・花嶋正孝)は、資源の循環型社会づくりに向けたさまざまな課題を、産学官民の共同研究体制で総合的にサポート・支援していく県設置の機関。リサイクルの事業化は、専門的な技術開発に加えて、研究にかかるコストや制度面で

の手続き、安定的なりサイクル原料の回収や再生商品を流通させるための仕組みづくりなど難題がある。リサイクルのアイデアがあっても、企業だけではなかなか実践できないのが現状だ。こうした中、同センターが、循環型社会のモデルとなるシステム構築の先導的な役割を担っていく。同センターでは毎年、共同研究のテーマを幅広く募集。多くの企業や研究機関、行政、NPOなどが参画してプロジェクトチームをつくり、共同で研究開発を行う。2001年の開設以来、新たなリサイクル製品の实用化など多くの成果を上げている。

3つの機能で循環型社会の構築を目指す

同センターでは、①リサイクル技術や社会システムにかかわる共同研究の実施、研究成果の地域展開や事業化の支援 ②環境・リサイクル関連情報の発信 ③アジア諸国の環境施策に貢献できる人材育成という、大きく3つの分野において事業を推進している。



持続可能な循環のまちづくり 大木町

紙おむつをリサイクル

高齢化に伴い、大人用の紙おむつの排出量は増え続け、各市町村にとってその処分が大きな課題となっている。大木町も例外ではない。



紙おむつ専用の回収ボックス指定の袋に入れて出す

そこで福岡県リサイクル総合研究センターは、家庭から排出される紙おむつをリサイクルしようと、大木町、紙おむつの再資源化に取り組み「トータルケア・システム(株)(福岡市)」と連携し、2008年から大木町で実証実験を重ねてきた。そして今年10月、紙おむつメーカー5社の協力も得て、本格的に回収事業をスタート。病院など事業所からの回収は行われているが、家庭から回収するのは全国初の取り組みだ。

町内の公民館など約60カ所に専用の回収ボックスを設置。週に2回、町が子ども用の紙おむつも含めて回収し、トータルケア・システムが大牟田市に設けている再処理工場で水溶化処理して再生パルプにし、建築資材としてリサイクルする。焼却処理に比べ、二酸化炭素の排出量を約4割抑えることができるという。

同センターは、大木町での取り組みを検証したうえで、将来的には他の自治体への普及に生かしたい意向だ。

家庭の生ごみが優れた有機肥料に

そもそも、大木町がリサイクル

に目を向け始めたのは、自前のごみ処理施設を持たない町の将来を考えてのことだった。

「少し前まで、生ごみは隣接する大川市清掃センターで焼却し、し尿などは海洋投棄を行っていました。しかしこの方法では、環境への影響や処理費用負担が大きい」と環境課の益田富啓さんは話す。

町はリサイクル総合研究センターと協力し、生ごみなどをバイオマス資源として活用する選択肢を模索。06年におおき循環センター「くるるん」の操業を開始した。生ごみ、し尿、浄化槽汚泥をメタン発酵させ、発電などのエネルギーとして利用している。さらに発酵



道の駅おおき

後の消化液を液体肥料として活用し、地域の農地に無料で散布。収穫された農産物

は、10年は、10月に隣接してオープンした「道の駅おおき」のレストランで食べることができると話している。

益田さんは「自分たちの生ごみが見える形でリサイクルされれば、再資源化への意識も違ってくる。住民の皆さんと一緒に持続可能な循環のまちづくりをしていきたい」と話している。



「今後はごみを出さない仕組みづくりが課題」と話す大木町環境課の益田さん



おおき循環センター「くるるん」。生ごみを液体肥料などに循環させる